



Title	『定家卿百番自歌合』三次本への改訂：四季と恋
Author(s)	細川, 知佐子
Citation	詞林. 2006, 40, p. 29-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67556
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『定家卿百番自歌合』三次本への改訂 ——四季と恋——

細川知佐子

はじめに

『定家卿百番自歌合』は、定家自撰の百番からなる自歌合で、「四季」「恋」「雜」の部立を持ち、その内部には綿密な結番や構成配列がなされている。成立については、定家の家集『拾遺愚草』の識語と、本自歌合序の記述により、建保四（一二一六）年二月の一次本成立から、同五（一二一七）年二次本成立、同七（一二一九）年の順徳天皇勅判本までの過程が知られる。しかしこの序を持つ伝本には、定家晩年の貞永元（一二三三）年に催された「闇白左大臣家百首」の歌が収載されており、貞永元年以降再度の改訂、つまり三次本への改訂が行われたことがわかる。但し、伝存するのは、二次本と三次本のみである^{〔1〕}。

三次本への改訂（以下三次改訂と呼ぶ）の先行研究は、樋口芳麻呂氏以来、改訂で差し替えられた切り出し歌と切り入れ歌を作品から抜き出し比較検討することによる、定家の好尚の変化の有無という観点で行われてきた^{〔2〕}。草野隆氏は、一連

の論攷で、本自歌合は「単なる自贊歌を集成したものでなく、緻密な文芸的配慮」に留意した考察が必要であることを指摘し、三次本への改訂についても、「単に切り入れられた歌を比較するのではなく、その結果として、既に構築されていた「結番」にどのような変化がもたらされているのかを考えることが必要」とされるが、指摘にとどまり具体的に述べられない。そもそも部立を持つ自歌合という形態そのものが、単なる自贊歌の集成、秀歌撰ではないことを示すであろう。そこで本稿では、定家晩年の三次改訂を取り上げ、これまでなされてこなかった二次本と三次本の改訂箇所の結番構成の比較から、綿密な配慮をした本自歌合が改訂によりどのような変化を遂げたか考察し、三次改訂がいかなるものであったか、その一端を明らかにしたい。なお、三次本への改訂では、番内部での左右の歌の入れ替え一箇所と、十首の差し替えが行われている。差し替え十首の内訳は、「四季（秋）」二首、「恋」四首、「雜」四首であるが、本稿では「四季」二首と「恋」四首の考察を行う^{〔3〕}。

一、「春」一二番と「秋」三六番の改訂

四季部は、本自歌合の半数五十番百首で、「春」「夏」「秋」「冬」に分けられ、「春」一二番に番内部左右の歌の入れ替えがあり、「秋」では「九番」、「三六番」の二箇所で差し替えが行なわれている。「夏」と「冬」では改訂がなされていない。改訂箇所の中、「九番」は次の三十番を含めた歌順の入れ替えを伴う差し替えで複雑となるため、順番が前後するが、本節では「春」一二番と「秋」三六番の改訂を考察する。

ではまず、番内部で左右の歌の入れ替えがなされている三

次本の「春」一二番を前後の番と共に次に掲げる（傍線は私に付した。以下同じ）。

一二番

左 樅の戸は軒ばの花のかげなれば床も枕も春の曙
右 花の色のをられぬ水にさすさをの零もにほふ宇治の河

長

一二番

左（右）名取河春の日数は顯れて花にぞしづむせぜの埋木
右（左）名もしるし峰の嵐も雪とふる山桜戸のあけぼのの空

（新勅撰・春下・九四）

紅葉

時雨つつ袖だにほさぬ秋の日にさこそ三室の山は染むら

め

花の香も風こそ四方にさそふらめ心もしらぬ故郷の春

め

今日こずは庭にや春ののこらまし梢うつろふ花の下風

左

右

となる（括弧内は「次本の配列」）。この入れ替えは桜の歌群中

にあり、前後の番も桜の歌の結番だが、「二番は山と川での

落花を主題にした一番である。樋口芳麻呂氏は改訂のこの部

分についてのみ、「十二番の歌の左右の順序を逆にしたのは、

十一番右の宇治の河長の歌に対しても、「十二番左に名取川の

歌を置いた方が、嵐山の歌を置くより自然であるからに外なら

ない」と指摘される。左右の歌を入れ替えることで、「一

番右「宇治川の桜」と「二番左「名取川の落花」が並び、「一

二番右「嵐に散る桜」と「三番左の「風」が誘う「花の香」

（落花）が並ぶ。樋口氏の指摘にあるように、前後の番の歌

との繋がりがより自然になった差し替えで歌そのものに変わ

りはなく、当然構成に変化はみられない。但しこの入れ替え

により、定家が前後の番との繋がりを重視していたことは明

らかである。

次に「秋」三六番の差し替えをみていく（□で囲った歌は

切り出し歌。以下同じ）。二次本の三六番は、

左 小倉山時雨るる比の朝な朝な昨日は薄き四方の紅葉ば
右 久方の月の桂の下紅葉やどかる袖ぞ色にいでゆく

であるが、三次本では、左が「関白左大臣家百首」「秋」の

（紅葉）題で詠まれた、

時雨つつ袖だにほさぬ秋の日にさこそ三室の山は染むら
め

花の香も風こそ四方にさそふらめ心もしらぬ故郷の春

め

今日こずは庭にや春ののこらまし梢うつろふ花の下風

左

右

となっている。差し替えられた二首を比較すると、いずれも

「時雨」によって色付く「山」の紅葉を詠んでいる。この一番は、三五番右の、

タづく日むかひの岡の薄紅葉まださびしき秋の色かなと、三七番左、

契ありてうつろはむとや白菊の紅葉の下の花にさきけんの「紅葉」を詠んだ前後の歌一首に挟まれた「紅葉」の歌群にあり、「秋」唯一の「紅葉」の歌の結番である。

切り出された「小倉山」の歌は、夏十八番右にも採られた、建保五（一二一七）年四月十四日の「院庚申五首」の歌で、詠歌年次から二次本切り入れ歌であることがわかる六首の中の一首である。つまり、二次本への改訂すでに一度差し替えられている。『拾遺愚草』によると歌題は「秋朝」だが、

前歌の「薄紅葉」を承ける「昨日は薄き」と「時雨」によって、毎朝次第に色を濃くしていく「紅葉」という趣向が生じるため、ここに置かれたと思われる。二次本における三六番内部の趣向は、左に「朝な朝な」に次第に色付いていく「紅葉」、右に「月の桂」の「紅葉」が宿とする「袖」が色を濃くしていく、という朝と夜の対比、あるいは「四方」と「久方」との詞の対比などであるうか。一方、三次本で新たに切り入れられた歌は、『新勅撰集』入集歌である。この差し替えは、新たに「紅葉」題で「時雨」を詠み込んだ季歌「タづく日」の歌を、それに相応しい場所に切り入れたものと考えられるが、改訂により名所が山城国「小倉山」から大和国

「三室山」に変わった。二次本では、前番右に詠まれた「むかひの岡」から「小倉山」の「紅葉」へ転じる構成であった。定家の山荘のある「小倉山」が詠まれているため、前歌の「むかひの岡」も山荘から見える辺りが連想される。それが三次本では、眼前の「むかひの岡」の「紅葉」から、紅葉の名所である大和の「三室山」の「紅葉」を、「時雨」により「さこそ」「染むらめ」と想像する形に変化している。これにより眼前の「紅葉」と、心に思い描く「三室山」の「紅葉」が重層的になり、構成に広がりができたといえよう。また、番内部では左右に「袖」が詠まれることで、歌語の連関が生じより緊密な一番となつた。

「紅葉」の歌群四首は、最初の三五番右が「薄紅葉」とあり、最後の三七番左では「白菊」と取り合わされ、「色」が強調された歌群構成である。その中心に位置する三六番は二次本、三次本共に、次第に濃くなる紅葉を詠んだ結番ということだが、切り入れ歌の「さこそ」「染むらめ」は、眼前の景色ではないために、一層鮮やかな「紅葉」が想像される。その意味で紅葉の名所である「三室山」は効果的といえるだろう。ここでの差し替えは、番内部が緊密となり、「紅葉」の歌群も色がより鮮明となつた上に、空間的広がりを持つ構成となつた。しかし、「春」の「桜」二番と同様「紅葉」の一番という構成に変化はない。

二、「秋」二九番の改訂

次に、「秋」二九番の差し替えをみていく。二次本「秋」

二九番右「花月百首」の「月」五十首から『新古今集』に入

集した、

さむしろやまつよの秋の風ふけて月を片しく宇治の橋姫

(秋上・四二〇)

が切り出されている。替わりに切り入れられたのは貞永元年

「閑白左大臣家百首」「月」題で詠まれた、

下荻もおきふし待ちの月の色に身を吹きしる床の秋風

だが、これは二九番右にそのまま差し替えられたのではなく、

三十番右に置かれ、二九番、三十番の他の歌も後掲するよう

に歌順が入れ替えられている。二五番から三十番は月の歌群

となっているので、月の歌群中での改訂となり、前節の

「桜」や「紅葉」と同様だが、ここでは一首の差し替えと共に、二九番、三十番という隣り合う二番四首の歌順の入れ替

えがなされ、より大きな改訂となっている。差し替えられた

列が変化しているので、二次本・三次本それぞれの当該箇所を前後の番と共に次に掲げる。(便宜上歌順に番号を付し、差し替え歌はゴチャックにした。) 二次本では、

二八番

1 左 明けば又秋の半も過ぎぬべしかたぶく月のをしきのみ
かは (新勅撰・秋上・二六二)

2 右 幾里か露けきのべにやどかりし光ともなふ望月の駒

二九番

3 左 高砂の尾上の鹿の声たてし風よりかはる月の影かな
4 右 さむしろやまつよの秋の風ふけて月を片しく宇治の橋

姫

三十番

5 左 露さえてねぬよの月やつもるらんあらぬ浅茅のけさの
色かな

6 右 独りぬる山鳥の尾のしだりをに霜置きまよふ床の月影

(新古今・秋下・四八七)

三一番

7 左 白妙の衣しでうつひびきより置きまよふ霜の色にいづ
らむ

8 右 秋とだに忘れむとおもふ月影をさもあやにくにうつ衣

(新古今・秋下・四八〇)

三次本では、

二八番

いはみられない。しかし、歌順の入れ替えにより、結番や配

- 1 左 明けば又秋の半も過ぎぬべしかたぶく月のをしきのみ
かは
- 2 右 幾里か露けきのべにやどかりし光ともなふ望月の駒
二九番
- 3 左 高砂の尾上の鹿の声たてし風よりかはる月の影かな
露さえてねぬよの月やつもるらんあらぬ浅茅のけさの
色かな
- 3 右
- 4 左 独りぬる山鳥の尾のしだりをに霜置きまよふ床の月影
下荻もおきふし待ちの月の色に身を吹きしをる床の秋
風
- 5 右
- 6 左 独りぬる山鳥の尾のしだりをに霜置きまよふ床の月影
下荻もおきふし待ちの月の色に身を吹きしをる床の秋
風
- 7 左 白妙の衣しでうつひびきより置きまよふ霜の色にいづ
らむ
- 8 右 秋とだに忘れむとおもぶ月影をさもあやにくにうつ衣
かな

となる。二次本・三次本で変化のない箇所から結番と配列をみていくと、二八番は左に「明けば」「秋の半も過ぎぬ」、右に「望月の駒」を置く。「望月」は信濃の地名だが、十五夜の「望月」との掛詞となつており、この一番は秋の半ばである八月十五夜の歌の結番で、二五番から三十番までの「月」の歌群の中心に位置するものである。その後「八番右」「望月の駒」から連想される形で、二九番左に地名プラス動物の歌であることはそのままである。三十番は、左に「独りぬる山

「高砂の尾上の鹿」が続くが、この後二次本では、「高砂」から「宇治」に場面が転じ、「風」を共通の語としながら二九番は名所詠の一番となつている。二次本成立時である建保期の流行である名所詠を意識した結番とみることもできよう。また、左「鹿の声」は妻問いのもの、右は恋人を待つ「宇治の橋姫」と、四季歌でありながら恋的性趣を持つ二首の結番である。次の三十番左では、「さむしろや」の「風ふけて」から「露さえて」「待つ夜」から「寝ぬ夜」という歌語の連関を持つ歌が左に置かれ、右には「独りぬる山鳥」の歌が合わされる。前番に続き、動物を詠み込んだ歌を一方に配しながら、恋的性趣を持つ「月」歌の結番である。ここで歌群としての「月」の歌は終わる。三一番左は、前歌の「霜置きまよふ」から、語順を換えた「置きまよふ霜」を詠んだ歌に続き、「擣衣」の一番となる。

では改訂によりどのような変化があったか、次に三次本をみていく。まず、二次本「九番右の「宇治の橋姫」が切り出されたことにより「高砂」と「宇治」という名所詠の結番が無くなつた。また、二九番右に二次本三十番左の「露さえて」が置かれたため、二次本で共通した歌語「秋風」の連関も無くなつた。替わりに左「月の影かな」右「今朝の色かな」と句末が揃つたようだが、「月」の歌という以外あまり共通点の見出せない結番である。但し、恋的性趣を持つ結番であることはそのままである。三十番は、左に「独りぬる山

鳥」の歌、右に切り入れ歌「下荻も」が置かれた。これも、差し替えにより、左右の結句が「床の月影」「床の秋風」と揃い、「床」という詞から、やはり共に恋的の情趣を持つ一番である。二次本にあった「霜置きまよふ」から「置きまよふ霜」への歌語の連関はなくなつたが、「おきまよふ」と右歌の「おきふしまち」が、似通つた音を持つので、次の「おきまよふ」に緩やかに繋がつてゐるといえよう。三次本で新たに見出せる趣向は、まず妻問い合わせに鳴く「鹿」と独り寝の「山鳥」をそれぞれの番の左に置き、右に恋的の情趣を持つ歌を合させたことである。二次本の「橋姫」のように、伝承や物語によつて何らかのイメージを連想させる女性像が無くなつたことにより、左に詠まれた「鹿」や「山鳥」を擬人化して詠んだ歌として右歌を味わうことができる。つまり右歌にも左の「鹿」や「山鳥」の姿が残像として残り、番内部の和歌世界に奥行きを持たせながら、一つのまとまりとする働きをする。そのため、歌順の入れ替えが行われたと推測される。加えて、それぞれの結句の表現が似通つたものとなり、二次本に較べ、番内部の結合が強くなつた。これにより歌合として、意味上も表現上も同種の二番が続くことになつた。建保期ながらではともいえる名所詠の結番という趣向が無くなつたこともあり、構成がすつきり整つたといえるだろう。四季歌の中での恋の風情ということで、定家は人ではなく、あえて「鹿」や「山鳥」によって恋の情趣を込めた月の歌を歌群後半に配列したと思われるが、二次本では、一九番を部立の「秋」とは直接結びつかない名所、「高砂」と「宇治」の名所詠の結番にしていた。

三次本の結番や構成全体をみた後で、二次本をみると「さむしろや」の歌の「宇治の橋姫」の存在感は大きく印象も強い。もとよりそれは、この歌の持つ魅力であり、「風ふけて」という表現と合わせ新古今時代の代表歌である所以だが、少なくとも自歌合の構成の中では、突出し過ぎる歌といえよう。定家の好尚の変化をいうのであれば、一首の歌そのものだけではなく、秋の月の歌群の結番や構成配列への好尚の変化といふこともできるのではないだろうか。また三次本では、月の歌群の最後を十九夜である「臥し待ちの月」で終わらせることにより、二八番の八月十五夜と照應させ、月歌群の最後であることを明確にしたといえる。

ここまで改訂箇所のある「月」の歌群後半をみてきたが、三次改訂による「月」の歌群内部の構成の変化をより明らかにするため、次に歌群全体の構成を考えたい。「月」歌群の前半三番を掲げる。

一五番

左　　しのべとやしらぬ昔の秋をへて同じ形見に残る月影
(新勅撰・雜一・一〇八〇)
右　　秋をへて昔は遠き大空に我が身ひとつのもとの月影

左 天の原思へばかはる色もなし秋こそ月の光なりけれ

(同右・秋上・二五)

いかにせむさらでうき世はなぐさまず頼みし月も涙落
ちけり

(千載・雜上・一〇〇四)

二七番

ながめつと思ひしことの数数にむなしき空の秋の夜の

月

右 昔だに猶故郷の秋の月知らず光の幾めぐりとも

「月」の歌群後半が、恋的情趣を持つ歌であったのに對し、歌群前半は叙景歌でありながら述懐性の強い歌が並ぶ。二五番左は『新勅撰集』、二六番右は『千載集』で「雜部」に入集している歌で、特に二五番左「しのべとや」は定家自身が雜部に撰入していることになる。また二七番左「ながめつ」には「述懐秋歌建久八年」の注記が付くが、建久八年は主家九条家が失脚したいわゆる「建久の政変」の翌年であり、定家自身も深い絶望を味わった時期の歌である。これら以外にも「昔」や「うき世」「故郷」が詠まれ、「秋」であることが更に強調される述懐の色彩が強い配列構成である。つまり「月」の歌群全体をみると、二八番の左「明けばまた秋の半も過ぎぬ」と右「望月の駒」という八月十五夜の一番を境に（秋の歌ではあるものの）前半は述懐に寄せ、後半は恋に寄せる月の歌といった対比による構成がなされていることがわかる。また二五番は「残る月影」「もとの月影」、二六番は

「光なりけれ」「涙落ちけり」と句末が似ていることも注目される。月の歌群後半の差し替えにより結句を揃えたことで、歌群の最初に置かれた二五番「残る月影」「もとの月影」と最後の三十番「床の月影」「床の秋風」が対称となり、歌群全体のまとまりも生まれたのである。差し替えにより、新たな趣向が生じたことを述べたが、正確にいえば、二次本ですでに構築されていた構成配列の趣向を、より完成されたものにし、歌群の前半と後半に統一感をもたせたといえる。

切り出し歌「さむしろや」は、『新古今集』入集歌であることや、「風ふけて」という表現が『無名抄』『近代歌牘事』で達磨宗と称されたように、いかにも新古今らしい和歌であることから、従来切り出しが問題とされてきた。切り出しの理由は、定家が新古今的表現を忌避したためかもしれない、その点を全く否定することはできない。しかしこのようによく「月」の歌群全体の中で、一一次本と三次本を比較すると、差し替えによって結番や歌群構成の完成度が増しているのは確かであろう。切り出しは本自歌合の中での構成配列上、新たにその場所に相応しい歌を得たことによりなされたということができ、定家の好尚の変化をいうのであれば、一首の歌そのものに注目するだけではなく、秋の月の歌群の結番や構成配列への好尚の変化ということもできるのではないだろうか。以上、一と二で四季歌の改訂をみてきたが、四季歌の中で歌材の順序を変えるなど、全体の構成配列を大きく変える

ものではなく、いずれも「桜」「紅葉」「月」といった歌群内部の変化に過ぎなかつた。また歌群内部の変化も、すでに二本である程度構築されていた構成配列の完成度を高めるためであつたといえよう。

三、「恋」五八番の改訂

恋部は、五一番から八十番の三十番六十首で構成される。五八番、六一番、七六番の三箇所で改訂が行われ、五八番では左右二首共差し替えられているので、合わせて四首の差し替えとなる。しかし、いずれも歌順の入れ替えはない。

はじめに恋部の改訂で重要なことを指摘しておきたい。それは切り出し歌が全て建保三年「内大臣家百首」の歌ということである。この百首は建保期の名所詠流行を反映して、恋二五首全てが「寄名所恋」題で詠まれており、本

自歌合（次本には二五首中一六首が採られている。「千五百番歌合」からは、本自歌合に二二首採られているが、「四季」一二首「恋」七首「雜」三首を合わせての数値（次本、三本共通）で、同一部立では最も多く採歌された催しである。その上これらのがほとんどは、五六番から五九番の四番八首と七五番から七七番の三番八首という具合に、歌群として配列されている。また「内大臣家百首」以外の名所詠九首も合わせると、次本の恋部三十番六十首中、二五首が名所詠で、これは恋部全体の四割以上を占めることになり、恋部に

おける名所詠の重要性を窺わせる。前述したように当時の歌壇の流行を背景とした採歌であろうが、その中でも歌数の多さと二つの歌群により、次本が「内大臣家百首」「寄名所恋」の歌を主調に配列構成されたことが推測されよう。一方切り入れ歌は、全て「関白左大臣家百首」の非名所詠である。三次改訂における恋部の差し替えは、一次本で主調となつた「内大臣家百首」の名所詠一六首から、四首を減じ一二首にして、新たな名所詠は加えなかつたことになる。

次に恋部全体の構成を確認する。最初の一一番である五一番は、左に「六百番歌合」から「新古今集」に入集した、

（恋一・一〇八）
なびかじな海人の藻塩火たきそめて煙は空にくゆりわぶとも

右に、「院句題五十首」の恋一首目「寄雲恋」で詠まれた、

（同・同・一一七）
しられじな千しほの木の葉こがるとも時雨るる雲に色し

みえねば

を番えており、左は「初恋」題で詠まれた恋の初めの歌、右はまだ相手に知られぬ恋の思いを詠んでいる。恋部最後の八番は、

（同・同・一一七）
左 須磨の海人の袖に吹き越す潮風のなるとはすれど手にも
たまらず
右 やすらひにいけるかたもしらとりのとば山松のねにのみぞなく

（同・同・一一七）
という名所詠一首の番で、海と山それぞれで恋の終わりを嘆

く一番となつてゐる。従つて、恋の初めから終わりまでといふ一般的な恋の部立構成と考えてよいと思われる。切り入れ歌は全て「関白左大臣家百首」の歌だが、恋の進行に応じた以下の歌題「恋恋」「不逢恋」「後朝恋」「遇不逢恋」からそれぞれ一首ずつ、しかもその順序通りに差し替えられているので、恋の進行に従うという大枠の構成に変化はないと考えられる。

以上を踏まえ五八番から順に差し替えを具体的にみていく。五八番は「内大臣家百首」の歌群の一つ、五六番から五九番の中の一番だが、左右二首共差し替えられており、「内大臣家百首」から採歌された名所詠の歌群が完全に分断されることになる。次に二次本五八番を示す。

左 甲斐が嶺に木葉吹きしく秋風も心の色をえやはつたふる

右 竜田山ゆふつけ鳥のおりはえて我が衣手に時雨ふるころ
この二首は「内大臣家百首」でも四首目、五首目と並んで置かれている。「甲斐が嶺」と「竜田山」という山の名所によえて、まだ相手に恋の思いを伝えられない歌と恋の涙を詠んだ歌の番だが、名所詠の番であるとともに、「秋風」「時雨」という季節を詠み込んだ一番でもある。これが三次本では次の、

左 うへ繁る垣根隠れの小篠原知られぬ恋はうきふしもなし
右 夜な夜なの月も涙に曇りにき影だにみせぬ人を恋ふとて
と差し替えられた。左は「恋恋」、右は「不逢恋」題で詠ま

れた歌で、相手にまだ知られていない恋と、恋の涙の一一番である。左は「二次本の「えやはつたふる」が「知られぬ恋」、右は同じく「我が衣手に時雨」という「涙」の比喩が「月は涙にくもりにき」という具合に、表現は変わっているものの、歌われる恋の状況にほとんど変化はない。但し三次本の歌は名所だけでなく季節も詠まされていない。二次本「甲斐が嶺に」の歌は『古今集』「甲斐が嶺をねこし山こし吹く風を人にもがもやことづてやらむ」(東歌・一〇九八)の本歌取である。恋歌における「秋風」と名所との組み合わせが八代集に一首しかなく、珍しいことから、建保期の定家が常套的な恋の「秋風」に工夫をみせ、当時流行した名所と取り合わせ詠出したものであることを、拙稿で指摘した歌である。

前歌である五七番右は「蘆の屋に螢やまがふ海人やたくおもひも恋も夜はもえつ」と夏の景物「螢」が詠まれ、二次本では「内大臣家百首」の名所歌群という上に、夏から秋という季節の流れが複合的に組み込まれていたことになる(海の名所から山の名所へという趣向も考えられよう)。しかし、五七番の左は「くるる夜は衛士のたく火をそれと見よ室の八嶋も都ならねば」と季節を示す歌語はなく、特に季節は意識されず、恋の思いを名所の景物によそえて「火」に譬えた一番である。つまり、五六番から五九番までの名所詠の歌群が分断されたことが、改訂による構成上最も大きい変化のようである。なお、切り出された名所については後述する。

四、「恋」六一番と七六番の改訂

次の差し替えは六一番左である。恋部は恋の進行に合わせた構成配列になっていることを述べたが、六一番の差し替えを考えるため、ここでは六十番からみていく。六十番は『新勅撰集』入集歌同士の結番、

左 恋ひ死なぬ身のおこたりぞ年へぬるあらば逢ふよの心づ
よさに

右 逢ふことは忍ぶの衣あはれなどまれなる色に乱れそめけ
ん

（恋五・九八三）

となっている。左右とも二次本での切り入れ歌だが、『新勅撰集』での収載巻はそれぞれ恋一と恋五となっているので、本自歌合とは異なる配列である。さてこの六十番は左が「久恋」題で詠まれた歌で、「年経ぬる」「あらば逢ふよ」とあり、恋死にすることなく年を経たのも、生きてこの世にあればまた逢えることもあるうという心強さのためですよ、というものである。前番右の「遇不逢恋」の状況を受け、その状態が久しく続く様を詠む。一方、右歌は建保四年「内裏歌合」の「恋」題の歌で、左歌四句目の「あらば逢ふよ」から初句を「逢ふことは忍ぶ」と置く。ここでは左の歌と番わされことで、人曰を忍ぶまれの逢瀬ということになろう。

これに続く六一番で、左の歌が差し替えられているが、二
次本では、

左 いかにせん浦の初島はつかなるうつつの後は夢をだにみ
づ

右 忘れずは慣れし袖もや氷るらん寝ぬ夜の床の霜の小筵
（新古今集・恋四・一二九）

である。左の切り出し歌は、「浦の初島」から「はつかなる」を引き出し、つかの間の逢瀬の後は眠られず、夢で恋人に逢うこともできなくなつたと嘆く。前歌の「まれの逢瀬」を承け、それがつかの間の逢瀬でしかなく、また逢いたいとの思いで眠ることができないと嘆くのである。右は「六百番歌合」「寄席恋」題で詠まれ、勝となつた歌である。俊成判詞が「寝ぬ夜の床の霜の小筵といへる、人の袖をも思ひやれる心、優に侍るべし」とするように、「忘れず」の主語は恋人であつて、恋人が自分を忘れずにいたら恋人の袖も今頃涙で凍つてゐるだらうと、恋人を思いやり一人「寝ぬ夜」を過す女の歌である。この結番は恋人を思い、眠れぬ夜を過す女の歌一首を合わせる。「内大臣家百首」の歌はほとんどが歌群として連続し、「内大臣家百首」の歌同士での結番、つまり名所詠の番となつてゐるが、六一番は二次本で唯一「非名所詠」と合わされた一番で、名所歌群中のものではない。

三次本で、新たに左に切り入れられた歌は、

今のまの我が身にかぎる鳥の音を誰うきものと帰りそめ
けん
という「後朝恋」題で詠まれた歌である。後朝の別れを告げ

る「鳥の音」を、その辛さ故に「いまのまの我が身に限る」とする、歌題に相応しい歌といえよう。また、前番六十番右歌「逢ふことは」に照應した「後朝」と考えられる。二次本が「眠れぬ夜」という同じ状況の二首並列の結番であったのに較べ、三次本では左の後朝の別れの朝から、右の「寝ぬ夜」という時間の流れができる、立体的構成の一一番となつた。左右に時間の経過が生じたことから、物語的になつたともいえる。しかし、恋の進行に従うという恋部の構成に変化はない。また、名所詠が切り出されたので、名所を含まない結番ともなつた。

恋部最後の差し替えは七六番右である。これも七五番から七七番までの「内大臣百首」の歌群中にあるが、五八番のような左右二首の差し替えではない。一次本七六番は、

左　袖の浦かりにやどりし月草のぬれての後を猶やたのまん
右　命だにあらばあふ瀬を松浦川かへらぬ浪もよどめとぞ思ふ

だが、三次本では右歌を切り出し、「関白太政大臣百首」「遇不逢恋」題の、

はるかなる人の心の唐土はさわぐみなとに言づてもなしを切り入れている。これまでみた二番は、いずれも差し替えにより名所を含まない番になつたが、ここは少し異なる。差し替えられた番だけでは、差し替えの意図が見え難いので、ここでも前後の番をみていく。前番七五番は

左　たのめおきし後背の山のひとことや恋を祈りの命なりける

右　形見こそあだの大野の萩の露移ろふ色はいふかひもなしである。左に「たのめおきし」「後背（後の瀬の山）の山のひとこと」、右に「あだの大野」「いふかひもなし」とある。左右共に地名を掛詞にして巧みに詠まれているが、左の「背」は恋人のことでもあり、恋人の一言を頼みにしている歌である。右歌の「形見」は、左の歌と番わされることにより、恋人の言葉と解釈でき、その言葉が「徒（あだ）」となつた、今さら恋人の心変わりを言つても甲斐もないとなる。この一番は、左に「ひとこと」右に「いふ」が詠み込まれ、同時に両首共地名そのものが掛詞になり意味を持つ。ただ意味を持つのではなく、恋歌に相応しい意味を持つのである。

続く七六番左「袖の浦」歌は、前歌の「いふかひもなし」を承け、仮の宿りの瀬の後、「月草」のように移ろいやすい心の（「いふかひもな」）恋人を「猶やたのまん」とする。七五番からは、恋の訪れが遠のいた後も相手の言葉を信じたり、諦めたり、また思い直して望みを掛けたりと揺れ動く女性の心が、地名を利用して物語のよう見事に配列されている。切り出された三次本の七六番右では「あふせを松（待つ）浦川」が、「後背の山」や「あだの大野」と同様の働きを持つ地名として配列されたのであろうが、「松」と「待つ」の掛詞は恋歌では常套的で、六二番右の「来ぬ人を松帆の浦

の夕なぎにやくやもしほの身もこがれつつ」すでに用いてもいる。「一首の眼目は、寄せては返す海の浪ではなく、流れ続けて行き、決して戻ることのない川浪を恋人に譬え、「帰らぬ浪もよどめ」と「思ふ」ことであろう。この「浪」が左の「袖の浦」から縁語によって続く趣向の結番と思われるが、

三次本では「唐土」のように「はるかなる人の心」は「言づても」ないとなり、左の「猶やたのまん」を挟み、七五番から恋人の「言葉」をキーワードにした配列が続くことになる。次の七七番左は、

忘貝それも思ひのたねたえて人をみぬめの浦みてぞぬる
だが、この歌の「思ひのたね」は三次本では、切り入れ歌の「言づてもなし」を承けて恋人の「言葉」と解釈できる。七五番から続いた「言葉」が、ここではそれも絶えてしまい、「みぬめ」を「うら（浦）」むこととなる。つまり三次本では、二次本の「待つ」と掛けた地名「松浦川」より、「言づて」という詞が重視され「はるかなる」に差し替えられたと考えられる。差し替えにより、「言葉」をキーワードとする物語的配列構成がより一層明確になったといえよう。同時に「松浦川」が異国之地「唐土」となることで、名所詠の歌群にアクセントができた。もちろんここで「唐土」は中国を直接以上三、四で「恋」の差し替え四首をみてきたが、恋の進

行に即した構成配列に変化はなく、名所が重視されていた箇所が、前後の番との繋がりを重視したものに改訂されたといえよう。

五、「恋」における「内大臣家百首」の名所詠

ところで改訂に際しては、歌そのものの吟味やこれまでみてきた結番、構成配列など、様々な要素で取捨選択がなされたと思われる。しかし、恋部では切り出し歌全てが名所詠、切り入れ歌全てが非名所詠であることから、選択の基準に「名所」そのものが深く関わったと推測される。そこで最後に恋部の差し替えで重要な要素となつたと考えられる名所について触れたい。二次本に採歌された「内大臣家百首」の名所を次に掲げる。上段が第一の歌群、下段が第二の歌群で、□で囲つたものが三次改訂で切り出された名所である。

（第一の歌群）

五六番左「吹上の浜」

七五番左「後背の山」

右「住の江」

右「あだの大野」

五七番左「室の八嶋」

右「蘆の屋」

五八番左「甲斐が嶺」

右「松浦川」

七七番左「みぬめの浦」

右「真間の継橋」

右「竜田山」

右「床の浦」

五九番左「竜田山」

右「緒絶の橋」

八十番右「とば山」

個々の名所以前にまず氣付くのは、恋部五一一番から八十番までの三十番全体の前半と後半に、対称的に歌群が置かれていることである。その上改訂箇所が歌群中のほぼ同じ部分であることから、二次本での名所に重点を置いた構成配列を意識した差し替えであることがわかる。さらに切り出しにより、三次本では「内大臣家百首」から採られた歌が前半六首、後半六首と数の上でも揃うこととなった。名所を個別に考えると、「四季」では山城国の名所「宇治」と「小倉山」が切り出されていたが、「恋」の切り出しでは例えば「甲斐が嶺」は甲斐国、「松浦川」は肥前国なので、差し替えの基準として都との遠近は関係がなさそうである。次に残された名所をみると、「床の浦」「緒絶の橋」「袖の浦」「みぬめの浦」といった、恋歌に相応しい語を含む名所が目に付く。このような傾向は恋の終わりを詠む後半の歌群に特に多い。「袖の浦」や「緒絶の橋」は、「建保名所百首」でも恋歌の歌題となっているが、そのような名所以外でも「住の江」は『百人一首』にも採られた、「住の江の岸による浪よるさへや夢の通ひ路ひとめよくらん」(古今・恋二・五五九・敏行)により、「浪」が「寄る」と「夜」を引き出し、恋歌に多く詠まれる名所で、定家の歌もこの歌の本歌取である。同様に「室の八嶋」も、「いかでか

は思ひありとや知らすべき室の八嶋の煙ならでは」(詞花・恋上・一八八・実方)でよく知られるように、「煙」とともに恋歌に詠まれることの多い名所である。定家は「煙」ではなく「火」を詠み込んでいるが、いずれにしても恋の思いと結びつきやすい名所である。

ひるがえって切り出された名所をみると、「甲斐が嶺」や「竜田山」はいずれも初句に置かれ、一首の中で掛詞として用いられていない。「甲斐が嶺」は、定家の歌の本歌となつた「甲斐が嶺をねこし山こし吹く風を人にもがもやことづてやらむ」より、同じく『古今集』東歌の「甲斐が嶺をさやにもみしがけれなく横ほりふせるさやの中山』(一〇九七)の方が有名で、恋歌と直接結びつく名所ではない。また「竜田山」で想起されるのは、いうまでもなく「紅葉」であって、恋歌とは結びつき難い。言い換えれば、二次本の段階では恋歌にあまり詠まれない名所であることに面白さがあり採歌されてきたと考えられるが、それは名所詠が数多く詠まれていた建保期だからこそ生じた面白さであろう。「浦の初島」や「松浦川」の切り出しについては、先述したような結番や構成配列上の理由が大きいと考えられるが、やはり「床の浦」や「緒絶の橋」ほど、恋歌に直截に結びつかない。

名所については、ひとつひとつに、それぞれの詠歌史ともいうべきものがあり、詳細な考察が必要で、建保期の『万葉集』摂取との観点からも考えていかなければならぬが、こ

こでは恋歌に相応しい名前を持つことや、恋歌に数多く詠まれる名所であることが、定家の選択の基準の一つであったことを指摘しておきたい。さらにいえば名所詠そのものが、三次本改訂時にはすでに目新しさのないものになってしまっていたのであろう。

結び

四季部と恋部における三次改訂の改訂箇所をみてきたが、いずれも新たに切り入れられたのは、貞永元年「閑白左大臣家百首」の歌であった。「四季」では「桜」「月」「紅葉」と、すべて歌群内部の改訂であって、例えば月の歌が月の歌に差し替えられ、四季の景物の置かれる順序が変わるなど、配列構成の変化はみられなかつた。恋部では「内大臣家百首」の名所詠歌群が分断されたが、「桜」や「月」という四季の景物の歌群とは異なり、「恋」の名所詠歌群は二次的な趣向であり、恋の進行に沿つた配列構成に変化はなかつた。このことから、「四季」と「恋」の三次改訂は、二次本での構成を変えることはなく、あくまでそれぞれの歌群内部の構成配列など細部変化にとどまり、その完成度を高めたものといえる。「四季」と「恋」に関する限り、新たに詠出された秀歌であつても、結番や構成配列上、本自歌合に切り入れが困難な歌は、撰入されなかつた可能性が考えられよう。

また、多くの名所詠が非名所詠に差し替えられた。¹⁵⁾名所が

一首中に果たす役割は一様ではないが、二次本と三次本との比較を通して切り出し歌をみると、概ね結番や配列のなかで、名所そのものがあり意味を持たない歌であつたといえる。繰り返しになるが、二次本が成立した建保期は名所詠が流行した時期であつた。そのような歌壇の状況の中で編まれた本自歌合は、当然その影響を受けたと思われる。晩年の見直しで、過剰に撰入し、結番や構成配列の中であまり必然性を持たない名所を含む歌が、定家の目に付いたとしても不思議はない。もちろん、構成の中より相応しい新たな歌があつてこそその改訂であるが、特に「恋」の改訂の大きな基準が、名所にあつたことは疑えないだろう。

注

(1) 成立に関しては樋口芳麻呂氏が「定家卿百番自歌合成立放」(『国語と国文学』三十一号 一九五三年六月)で、その過程を明らかにされた。

(2) 注1論文。同氏には、他に「建保五年本定家卿百番自歌合とその考察」(『国語国文学報』四号 一九五九年三月)、「自歌合の季節」(『愛知淑徳大学論集』二一号 一九九六年三月)がある。

(3) 部矢祥子氏は「定家卿百番自歌合」について(『中世文芸論稿』八号一九八三年十一月)で三次改訂を『新勅撰集』の撰歌資料とするためとされる。

(4) ①「定家卿百番自歌合」の結番方法(『国文学論集』十六号一九八二) ②「定家卿百番自歌合」雑部の構成をめぐつて

（上智大学国文学論集）十七号 一九八四年一月）③「定家卿百番自歌合」の成立と改稿—その一成立—『国文学論集』十八号 一九八四）。

（5）「雜」四首中三首は賀歌の改訂で、承久の乱後の政治的状況を含む考察が必要であり、問題が大きいと考えられるので、統稿で「雜」四首の考察をしたい。

（6）注（1）論文。

（7）為家は、切り出された「小倉山」の歌を評価しており、『続後撰集』に入集させ、『詠歌一体』では「昨日はうすき」を制詞としている。このことは、本自歌合を單なる秀歌撰として安易に扱うことへの注意を促すものであろう。

（8）拙稿「定家の百首歌における「有明」—四季歌を中心にして—」（『詞林』第三十五号 一〇〇四年四月）において、定家が「花月百首」の月五十首で月齢にこだわった配列を行っていることを指摘したが、本自歌合でも月の歌群の中で「花月百首」の月齢による配列をそのまま利用している。なお、この二首は「花月百首」の月五十首中でも並べて置かれている。

（9）宇治の「橋姫」については『奥義抄』『袖中抄』などの歌学書に記述がある。

（10）ではなぜ、少なくとも一次本でこの歌がここに配列されているかという疑問がわく。これについて私見を述べると、定家は、本自歌合に先行して成立した良経の『後京極殿御自歌合』において、春の「佐保姫」と秋の「立田姫」が対応して置かれていることを参考にしたと推測される。本自歌合で「春」の「桜」歌群中にある八番左の「袖ふる」「乙女子」と対応させ、「秋」の「月」歌群中に「宇治の橋姫」を置いたと考えるものである。なお、この趣

向は家隆にも継承されたようで、『家隆卿百番自歌合』では「春」と「秋」を逆転させ、「春」四番右に「宇治の橋姫」、「秋」二四番右に「袖ふる」「乙女子」を置く。

（11）注（1）論文、辻森秀英氏「定家の百番自歌合の撰歌態度について」（『国文学研究』一九五八年三月）。

（12）「定家八代抄」と勅撰集恋部の四季配列—『新古今集』との比較を中心にして（『百舌鳥国文』第一六号 一〇〇五年三月）。

（13）唐沢正実氏が「建保期の名所歌合」二種及び「難題和歌」について（『古典論叢』第一九号昭和六二年二月）で、建保期の名所詠に「掛詞の使用が多いこと」を指摘されている。

（14）二次本成立後の詠出で、『新勅撰集』に入集していながら、三次本に切り入れられていない歌が一首あるが、それは「葵祭」の歌である。日にちが特定される行事の歌であるため撰入が困難で切り入れられなかつた可能性が指摘できる。

（15）新日本古典文学大系『中世和歌集 錦倉篇』川平ひとし校注『定家卿百番自歌合』（一九九一年 角川書店）一五五頁脚注に指摘がある。

【使用テキスト】

【付記】本稿は平成十四年度和歌文学会関西例会（七月二七日 於大阪女子大学）における口頭発表に加筆修正したものである。席上及び終了後に御教示頂いた先生方に心より御礼申し上げます。

三次本・宮内庁書陵部蔵『百番歌合』を用い、一部他本によつて校合した。

※引用に際し、適宜漢字表記に改め、濁点を私に付した。

(ほのかわ・ちさこ 本学大学院博士後期課程)